



介護の伝道師

荒川区男性介護者の会

(オヤジの会)の代表

荒川不二夫さん



「好きで病気になったわけではないのだから」

荒川区男性介護者の会 オヤジの会の代表 荒川不二夫さん(89歳)は2009年設立した全国組織「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」(京都)の代表でもあります。

「予備知識もなく突然始まった介護、どうすればいいのだろう」

昭和61年、病気で半年入院して戻って来た奥様が自宅の階段から転落し、脳内出血を起こしたことから始まりました。荒川さん59歳、奥様51歳の時でした。病院に再入院しましたが、騒ぐからと廊下にベッドを出されてしまった様子を見て自分で奥さんを介護しようと思いましたが、30年近く前のことですから、介護保険制度もなくどこに相談したら良いのかも判らない状態でした。工務店をしながら、慣れない家事全てと介護に、とまどいと思つた日々でした。

「現場から電話をいつも入れてました」

日中、一人になる奥さんに仕事中に毎

日何度も変わらないかと電話をしていました。

手足が徐々に自由が効かなくなっていく奥さんのために自宅内に手摺りをつけ、シャワーチェア・室内歩行器・ポータブルトイレを作りました。食事作りも忙しい中、ぬか味噌や梅干しも作りました。

「お父さん、ありがとうね」

8年の在宅介護の後に亡くなった奥様の最後のことはです。

その後、長男の方を突然難病で亡くされ、その2年後には次男さんが運動機能障害のある難病になり、認知症も発症しました。

「階段に物を置くのも意味があるんです」

次男の方が階段から落ちて、置いてある荷物がクッションになり怪我を防ぐからとのこと。なかなか、そこは在宅で介護されている当事者でないと判らないことです。

「お手上げになる前に」

次男の方も3年間在宅で介護されています。53歳の要介護4の方を89歳の荒川さんが介護することにも限界があります。苦渋の選択でしたが、今は次男の方は施設に入所し毎日面会に行かれています。

「相手の立場に立っていたわりと愛情を持って言葉に気を使って」

面会に行き、相手の感情を損なわないようにゆっくりゆっくりと理解しやすいように話

すことを心がけて漫才のような会話を楽しんでます。

もう一人の肉親のお孫さんも次男の方の介護が始まってから24歳の若さで亡くなり、次男の方だけがたった一人の肉親です。

「なぜ自分かと思つたことがありますか」
「運命だから」と笑顔で話す荒川さんは、九州意外は全国各地に講演で呼ばれています。

6年前に取材させて頂いたことがあります。その当時と変わらず、過酷な運命を昇華する明るく笑い声の絶えない荒川さん、私の尊敬する方です。

「プライドを捨てなくては」

男性介護者はプライドが邪魔をしてなかなか悩みを吐き出す場所がありません。ぜひ、荒川区男性介護者の会に参加して心を和らげてみませんか。

☆荒川区男性介護者の会 オヤジの会

年会費 2400円

奇数月 男性介護者サロン 「M」

第二金曜日 13時半～15時

荒川区社会福祉協議会3Fボランテイ

アセンターで開催 参加自由(無料)

6月20日(土) 18時～21時 懇親会

荒川区社会福祉協議会3Fボランテイ

アセンター 参加自由 懇親会費1500円

(会員千円)

年会費二千四百円 懇親会費千円